「崩壊した馬入川鉄橋」（1923 年：大正 12 年）

平成24年度　文化資料館特別展

写真とことばが伝える 茅ヶ崎の関東大震災

茅ヶ崎市教育委員会

ごあいさつ

1923（大正12）年9月1日午前11時58分、相模湾を震源とする大地震が発生しました。マグニチュード7以上の地震が5分間で4回も起き、関東各地に甚大な被害を及ぼしました。

茅ヶ崎でも家屋だけでなく、駅舎や学校などを含めた多くの構造物が全半壊の被害を受けたと伝えられています。また、関東大震災が茅ヶ崎に及ぼした被害を伝えてくれる資料として、写真や絵はがきが多く残されています。

地域には、震災を経験した方々が直接体験したことや見たことなど、地域で語り継がれているの「記憶」があります。そういった「記憶」を聞き取り調査した「ことば」は、関東大震災が発生したとき、茅ヶ崎で何が起き、当時の人々がどのようなことを体験したのか、ということを伝えてくれる貴重な資料です。

2013（平成25）年に、関東大震災の発生から90年目を迎えます。本展では、茅ヶ崎の人々がどのように地震という自然災害と向き合い、助け合いながら復興していったのかという様子を、当時の「写真」や「ことば」を中心に紹介いたします。

展示しております「写真」と「ことば」は、市民の皆様からご提供いただいた貴重なものです。特に「ことば」は、聞き取り調査にご協力いただき、記録保存されたものです。貴重な資料の保存にご協力をいただきました市民の皆様に深く御礼申し上げます。

平成２４（２０１２）年１２月

茅ヶ崎市教育委員会

茅ヶ崎市の概要

茅ヶ崎市は東西６.９４km、南北７.６０km、周囲３０.４６km で面積が３５.７６ｋ㎡です。南は相模湾に面し、北は高座丘陵の最南端で、火山灰や軽石が堆積した関東ローム層からなる丘陵地があります。丘陵地から海岸に至るまでの西側の半分は、河川が運んだ土砂の堆積物などによる沖積低地の平地、丘陵の南面から海岸の砂で形成された砂丘地があります。

北部の丘陵地は、雨水や河川の浸食によってできた数多くの谷戸があります。沖積低地は、現在のように宅地造成が進む以前は広々とした農耕地であり、屋敷林や社寺林は樹木で覆われ、現在でも一部の地域では以前の姿のままで保全されて残存しています。河川流域は農耕地の水利となり水田耕作に重要な役割を果たしています。

砂丘地には、明治以降に別荘が立ちはじめ、結核療養所である南湖院が開院しましたが、相模川に近い西の地域（南湖や柳島、中島を除く）に人は居を構えず、南湖より以東の小高く起伏した砂丘上には、明治のころから砂防林としてクロマツが植えられました。

地震の発生

１９２３（大正１２）年９月１日土曜日は、農業を営む人々にとっては月休みであるショウガツ（正月）という農休日にあたり、当市の多くの農家が仕事を休んでいました。また、明け方から強い雨が続いていたため、漁に出た舟はありませんでした。午前１０時頃に雨があがってからは、真夏のような太陽が照りつけて、厳しい暑さであったといわれています。

地震発生の直前に、当市の西南の方から地鳴りのような、もしくは大地が裂けるような異様な唸りを聞いたと多くの体験者が語っています。その直後に、縦揺れがあり、気が付くと大きな横揺れの中にあった、と言われています。

橋鐵川入馬線道海東道鐵ルセ落墜

茅ヶ崎の農家では午前１１時頃に昼食をとり、しばらく昼寝をした後に午後の仕事にとりかかります。地震発生時刻の午前１１時５８分は、多くの農家で昼食を終えていたようです。

地震の被害

当時の茅ヶ崎町役場の文書によれば、約２万人の人口のうち、死者１５６名（男６５名、女９１名）、重傷者 61 名、また 3，426 戸の住宅のうち全壊 2，112 戸、半壊 1，207 戸、４か所で出火したが全焼は１戸と記録されています。

大きな建造物では、堤防や道路、橋梁が破損、馬入橋や東海道線の馬入川鉄橋は崩落、茅ヶ崎駅の駅舎や町役場、純水館の製糸工場７棟、当時市域にあった４つの尋常高等小学校（茅ヶ崎、鶴嶺、松林、小出）のすべてが倒壊しました。当日の小学校は、２学期始業式の日で午前に式を済ませ子どもたちは下校していましたが、鶴嶺小学校で６年生の男子１名が亡くなっています。

市内各所で、道路や田畑での地割れや隆起、陥没、液状化が発生したことを伝える証言が多く残されています。特に、余震の度に広がったり狭くなったりする地割れや、そこから噴き出す泥水に恐怖を感じた人が多くいました。

また、津波に備え、松尾の人々は南湖の八雲神社に、南湖は円蔵・鶴が台の北側の赤羽根山に、円蔵は甘沼・香川に、平太夫新田は甘沼に、西久保は香川・堤の浄見寺に避難していますが、「津波は来なかった」と伝えられています。

一方、「平島（現在の漁港の防波堤）まで潮が引き、国道 134 号あたりまで戻った」という証言や、「相模川をさかのぼった津波により舟が流された」という証言が海岸地域で記録されています。

湿地帯であった柳島周辺では、相模川の流れが変わるほどの地盤の隆起があったことが確認されています。

倒壊した茅ヶ崎駅の駅舎

地震後のくらし

茅ヶ崎では、幸いにも地震の二次災害となる火災がありませんでした。しかし、震災後の住環境の悪化で衛生状態が悪くなり、腸チフスが流行しました。

震災直後、軍の第６師団（熊本）救護班が第六天神社（十間坂）に診療所を設置し、また、日本赤十字社や町内の医師たちも救護活動をしました。診療所は 190 日間開設され、682 名を診療しました。

余震の回数は日が経つにつれ減っていきましたが、多くの人が庭先に作った掘立小屋で９月中旬まで過ごしました。その間に倒壊した家屋の材を用いてバラック（仮屋）を造り、同月下旬頃から半壊の家屋の修理が始まりました。

震災後に建てられたバラック

震災の混乱に乗じ、様々な流言（デマ）が広まったので警戒のため、地域単位で自警団を組織し、集落入口に見張番をたてたりしました。震災から１週間後、軍の歩兵第４９連隊（甲府）第７中隊が戒厳令による警備のため茅ヶ崎に到着しました。これにより流言もなくなり、平静を取り戻しました。警備部隊は 10 月 11 日には引き上げましたが、憲兵分遣所が置かれ、騎乗憲兵が町内を巡回したため、多くの人が安心したといわれています。なお、当地には巡査駐在所しかありませんが、10 月には警部補派出所が設置されました。

地震によって、地中より旧相模川橋脚が出現したほか、海岸一帯の地盤が隆起しました。また、満潮時に海水が流れ込んでいた柳島の低湿地が隆起し、以後、耕作可能な土地となりました。土地の隆起は南湖、中海岸、小和田といった地域でも確認され、また海岸付近も隆起により砂浜が拡張しました。

復興

地震による応急の罹災対策は、人口が密集していた新町（現在の新栄町・元町・共恵・幸町）・南湖地区で急がれました。茅ヶ崎町では９月４日までに被害調査を行い、６日には町会で食料の供給を決議し、米や麦、砂糖、食塩などを分配しました。

一方、東京・横浜などの方面から避難してくる人は日ごとに増え、最終的に３８３世帯、1，523 名に達しました。茅ヶ崎を通過する避難者のために、十間坂の煉瓦場を仮宿泊所として提供し食糧を支給しました。

また、バラックの建設や倒壊住宅の修理用に、トタン・板・釘などの建材が大量に供給されました。衣類・日用品も配給されました。

復興事業で特筆されるべきことは、馬入橋の架橋工事のために京都から来た工兵第１５・第 16 大隊が、倒壊した茅ヶ崎小学校を宿営地としたため、工兵たちは架橋工事とともに仮校舎３棟の建築を行ったことです。

町役場は地震発生から２年後の 1925（大正 14）年に竣工し、これと前後して市内の小学校の再建工事も進められ、1926（大正 15）年にはほぼすべての小学校の校舎の建築が完了しました。

小出村では、小出小が 1923（大正 12）から、村役場は翌年から再建が行われました。

工兵により架けられた馬入川仮橋

馬入川鉄橋の再建は鉄道省により行われ、1923（大正 12）年 10 月 21 日から東海道線の運転が再開されました。また、馬入橋は、工兵隊により同年 10 月４日に仮設の人道橋が架けられ、1926（大正 15）年にはそれまでの木造のものに替わり、新たにコンクリート製の橋が架けられました。

なお、震災に伴う海岸一帯の隆起により、小出川、千ノ川の流路は大きく変わり放流口がなくなったため、河川改修工事が１９２５（大正１４）年から１９２７（昭和２）年にかけ

て行われました。
　震災復興のための財源は、長期返済の借入金を財源としたため、国や地方の財政状況は不安定な状態となりました。そのような不安を抱えたまま、農産物価格の暴落、漁業の不振といった昭和恐慌の経済問題に対処することになったのです。

祈り

　関東大震災によって、茅ヶ崎町では１５６名の方が亡くなりました。その原因の多くが、住宅の倒壊によるものでした。当時は、茅葺屋根の木造住宅が多く、茅ヶ崎町の住宅３，４２６戸のうち半数を超える2，１１２戸が全壊し、ほかに1，２０７戸が半壊しました。
　関東大震災の記憶をとどめ、亡くなった方々への祈りを込めた供養碑が市内９ケ所の社寺境内に建てられています。

熊野神社（小和田）

正覚院（堤）

「くらしの記憶」を保存する

茅ヶ崎における関東大震災の影響を検証しようとしても、地震の実態に関する歴史資料は多くありません。震災の公式記録である『関東震災志』（内務省,1926 年）や『神奈川県震災誌』（神奈川県,1927 年）において概況には触れられているものの、地域の罹災状況についての詳細な記録が残されていません。人的・物的な被害が甚大であった東京・横浜方面の研究が重視されてきたためか、それ以外の地域の記録はあまり集められてきませんでした。

本展では、過去の記録が少ない中、震災を体験した方々からの聞き取り調査で得られた「ことば」を「写真」とともに紹介しました。

人の「記憶」は、時間とともに風化し、後に見聞きしたことによって記憶の内容が変わってしまうため、その正確さを欠いてしまうことは否めません。しかしながら、地域の歴史において重要なのは、その実態を明らかにすることであり、人々が語る地域の記憶は欠かすことのできない貴重な資料です。今回紹介した「記憶」、「ことば」は、市民の方々の協力を得て記録したものです。

人々の「くらしの記憶」を記録・保存し、次世代に伝える役割を担っていくため、文化資料館は今後も市民のみなさんと協力した活動を展開していきます。

崩落した馬入橋鉄橋橋台跡（平塚市馬入）

国指定史跡・国指定天然記念物「旧相模川橋脚」

【参考文献】

『茅ヶ崎市史 2』茅ヶ崎市, 1978
『茅ヶ崎市史 4』茅ヶ崎市, 1981
『茅ヶ崎市史 5』茅ヶ崎市, 1982
『茅ヶ崎むかし語り』茅ヶ崎市, 2002
『ちがさきの関東大震災』茅ヶ崎市, 2012
『柳島生活誌』茅ヶ崎市教育委員会, 1979
『南湖郷土史』茅ヶ崎市教育委員会, 1995
『震害調査報告』復興局, 1927
『神奈川県震災誌』神奈川新聞社, 1983
『としよりの話』あしかび郷土史研究グループ, 2000

特別展「写真とことばが伝える茅ヶ崎の関東大震災」

主催　茅ヶ崎市教育委員会
　　茅ヶ崎市文化資料館（担当：須藤　格）
発行　平成 24（2012）年 12 月
http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kankou/8137/010670.html
shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp